

日本語によるロッシーニ・オペラ目録

—— 批判的注釈を伴う日本語による作品目録の試み ——

水谷彰良 編・注釈

初出は『ロッシニアーナ』第33号(2012年)所収の拙稿(33-52頁)。書式を変更してHPに掲載します。
(2012年12月)

はじめに：現在もなお不完全なロッシーニのオペラ目録

有名作曲家ロッシーニとあれば、当然のこととして音楽事典にその作品目録が掲載されている。20世紀最後の20年間に最も信頼性が高いとされたのが1980年に出版された『*The New Grove Dictionary of Music & Musicians* (新グローヴ音楽・音楽家事典)』(Macmillan, 1980.) 所収のフィリップ・ゴセット (Philip Gossett) によるロッシーニ作品目録で、多くの文献が典拠としてきた(以下Gossett-1980と略記)。その日本語訳は1995年に講談社が出版した『ニュー・グローヴ世界音楽大事典』第20巻に掲載されているが、編集方針やさまざまな制約が原因で*La Cenerentola*に「シンデレラ」、*Ermione*に「ヘルミオネ」、*Guillaume Tell*に「ウィリアム・テル」の訳題が与えられている。こうした訳題が不適切であるのは言うまでもなく、結果的に日本語のロッシーニ・オペラ目録の原本にはなり得なかった。

その後ロッシーニ財団による研究と全集版の編纂が進んでGossett-1980の改訂も不可避となり、その一端は2001年に出版された同事典第2版(以下、Gossett-2001と略記)のロッシーニ作品目録に反映されている(例:『アルミーダ』の初演日を11月11日から11月9日に訂正)¹。とはいえ第2版もあくまで20世紀末までの研究成果の反映にすぎず、現在では更なる改訂が必要となっている。作品名としての*Adina, o Il califfo di Bagdad*もその一つで、2000年に出版されたこのオペラの全集版では*Adina*が正式な題名とされた²。ロッシーニ作品の研究は現在も途上にあり、現時点で確定しない題名もあることから——本目録37『モイーズ *Moïse*』を参照されたい——、作品目録も最新の研究や全集版の進捗に従って随時補正されなければならない。これとは別に、日本人である私たちには全く別な視点での課題が残されている。それが明確な表記原則を適用した日本語によるロッシーニ作品目録の構築である。

日本語によるオペラの邦題と作品目録の諸問題

従来の日本語による題名表記は執筆者によって異なるだけでなく、NHKや音楽出版社の定めた(もしくは慣用化された)邦題や表記もあって混乱を招いてきた。そこには「ウィリアム・テル」のように訳題としては全く不適切なものも含まれるが、にもかかわらず最も広く普及したのが「ウィリアム・テル」なのである。

ロッシーニ作品で最も上演頻度の高い*Il barbiere di Siviglia*も、上演、放送、出版媒体ごとにその訳題が、「セビリアの理髪師」(NHK、新国立劇場)、「セビリアの理髪師」(藤原歌劇団)、「セヴィリアの理髪師」(二期会)、「セヴィリヤの理髪師」(ボローニャ歌劇場来日公演)、「セヴィラの理髪師」(東京オペラプロデュース)と5種にのぼる。これに1917年(大正6年)の日本初演時の題名「シキルリアの理髪師」もしくは「シキ^キルリアの理髪師」³、大正・昭和初期の題名「セビラの理髪師」「セヴィラの理髪師」「セヴキラの理髪師」「セビールの理髪師」、筆者が常用する「セビリーヤの理髪師」を加えると1ダースになってしまう(「理髪師」の代わりに「床屋」を用いる表記もあるので、実数はさらに多い)。こうした異同は主に外国地名のカタカナ表記の違いに起因しているが、他にも題名の人名をそのままカタカナにするか史実の人物の日本の一般表記にするかで*Mosè in Egitto*は「エジプトのモゼ」「エジプトのモーゼ」「エジプトのモーゼ」の3種となり、原作文学の邦題が先に流布したため*La donna del lago*が「湖上の美人」とされるなどの問題があり、作品ごとに原因と結果はさまざまである。

イタリア語で表記された人名のカタカナへの置き換えもアクセントや長音に音引きを適用するか否かで「タンクレディ」と「タンクレディ」に分かれ、原語の人名発音と歌唱における発音(しばしば楽譜上の音符の当て方に起因する)のどちらを採るかで「オリ伯爵」と「オリー伯爵」に分かれる。加えて日本語には漢字、ひらがな、カタカナの3種

¹ 他にも『幸せな間違い』の原作を「バイジェットのオペラのための G.パロンバ台本」とする記載の削除、*Aureliano in Palmira*の台本作家のG.F.ロマネッリからフェリーチェ・ロマーニへの変更がある。

² 不思議なことに、Gossett-1980.で*Adina*だったそれがGossett-2001で*Adina, o Il califfo di Bagdad*と変更されているが、その理由は定かでない。

³ 日本初演の題名は増井敬二『日本のオペラ 明治から大正へ』(民音音楽資料館、1984年) p.323.で「シキルリアの理髪師」とされ、同じ増井敬二『日本オペラ史(上)～1952』(昭和音楽大学オペラ研究所 編、水曜社、2003年) p.113.では「シキ^キルリアの理髪師」となっている。

をいうることから、「どろぼうかささぎ」「泥棒鶴」「泥棒かささぎ」「泥棒カササギ」のどれもが可能で、これとは別に「盗むかささぎ」など別な訳題もありうる。*La Cenerentola* も一般人に意味不明な「ラ・チェネレントラ」「チェネレントラ」より題材や内容を反映した「シンデレラ」の使用が有益、との意見があって当然であろう（筆者の考えでは、弊害の方が遥かに多いが……）。

こうした問題を解決したいと願う人はいても、明確な原則を示して日本語のオペラ作品目録を提示した例は絶無である⁴。それでも明確な原則を提示して一定の答えを導くのは可能で、そうした努力は問題の根幹を理解するためにも有益である。ここで強調したいのは、邦題をめぐる問題の所在を明らかにすることそれ自体が研究テーマとなる点である。イタリア語のカタカナへの置き換えもイタリア語学者の間に未解決の問題があり、ロッシーニ作品にはロッシーニ作品固有の諸問題も存在する（初演時の題名と流布した題名との違い、全集版で初めて確定する正式題名など）。それだけではない。劇の区分名称や劇場の名称、作曲時期や初演日に関しても研究の進捗に基づく変更があり、それらを含めた包括的な再検討が必要なのである。それゆえ原則や検討の過程を明らかにせずに結論だけを示す作品表は無意味で、問題の所在や解釈の多様性を検討する批判的注釈が不可欠となる。

本稿は、こうした観点に立脚した筆者の個人研究に基づく日本語のロッシーニ・オペラ作品目録で、筆者がこれまで用いた邦題への自己批判と決定的変更を含んでいる。邦題は例外的事例を除いて原則として一つに絞り込んだ。しかしながら、ここに示す邦題を日本ロッシーニ協会の使用原則とするつもりはない。重要なのは筆者の原則と解釈を批判的注釈によって明確に提示することであり、これに対する忌憚のない批判や助言も仰ぎたいと思う。本目録は日本ロッシーニ協会のホームページにも掲載し、批判や助言に基づく訂正と変更があればホームページで明らかにしたい。

本作品目録の掲載項目

日本語によるロッシーニのオペラ作品表に注釈を付した本目録は、「通番号と題名」「劇区分」「台本」「自筆楽譜」「全集版」の5項目からなる。最初に各項目の原則と細目を明らかにしておこう（本文では注釈が必要な部分に「*」「**」を付し、問題点、筆者の解釈やその根拠、選択の基準などを明記する）。

通番号と題名……作曲順の通番号、筆者の選択した邦題と原題。

通番号は全集版における I/1~の区分番号から「I/」を除いたもので、従来の 39 のナンバーとの間に異同はない（I/ は、オペラ作品のセクションを示す）。

題名の原語表記は初版台本に準拠するが、通例すべて大文字の台本記載を一般的な表記に置き換えて示す（普通名詞は頭を小文字で表記）。初版台本の題名記載が特殊なケースや再演後の通称（最も広く流布した題名）がある場合は、通称と初版台本の題名を併記して注記した（例：初版時の題名が再演や通称と大きく異なる 17 《セビーリャの理髪師》、37 《モイズ》）。題名にみられる人物名のカタカナへの置き換えは、原則として当該オペラにおける発音を、楽譜での音符の与え方も考慮して選択した（歴史的人名とその諸問題については、該当作品の注記で明らかにする）。題名に含まれる地名は、原語発音に基づく各国語の辞典や外国地名事典のカタカナ表記から最も適切と思われるものを選択し、歴史的地名については該当作品ごとに注記した（例：15 《イングラント女王エリザベッタ》、23 《ブルグントのアデライデ》）。

劇区分……幕数を加えて書式を統一した劇の区分名称とその原語表記。

原則として初版台本での呼称や区分名称に基づき、日本語記載は「○幕の△△△」のように「の」を挟んで「幕数+区分名称」に統一した。その際、区分名称そのものは日本語への置き換えが困難なため、すべてカタカナ表記とした。欧語の記載は台本記載に準拠するとともに、すべて大文字のそれを頭小文字にして表記を統一、初版台本のタイトル部分に幕数を欠く場合はこれを【】内に補足して注記した。

台本……台本作家の名前（カタカナと原綴）と生没年、台本の言語。

作家名の異同、生没年に訂正のある場合は、その旨と典拠を注記する。

初演……初演年月日、初演都市、初演劇場の名称。

劇場名は日本語による一般表記を採用し（例：スカラ座、フェニーチェ劇場、オペラ座など）、問題点を注記する。劇場名の原語表記も同様に、一般的な表記を（）内に示し、初版台本の記載を別記した（同一の劇場でも、台本ごとに名称の表記に異同がある）。

⁴ 日本ヴェルディ協会は平成 20 年度事業として「ヴェルディ・オペラ邦題委員会」を設置してヴェルディ・オペラ邦題の見直しを行い、その結果を同協会『ヴェルディアーナ』第 22 号紀要号（2008 年 10 月発行）pp.101-104.に掲載したが、全集版の題名表記と理論的な基準を無視して原則を曖昧にしたため「*Oberto, Conte di San Bonifacio*」の邦題を「オベルト」で良いとするなど、むしろ誤った結論が導かれている。

自筆楽譜……自筆楽譜の所在に関する簡略記載。

略号を含めて Gossett-2001 に準拠。筆者の判断で新たに追加したものは注記する。

全集版……ロッシェニ財団による全集版の I / 1～の区分番号と書誌データ。

出版済みの場合は校訂者と出版データを（）内に示す。未出版の作品で第一次校訂譜による上演が行われている場合は校訂者名も明らかにされているが、出版時に校訂者の追加や変更の生じるケースがあるので記載しない（現時点で未出版の巻はすべて未成立とする）。なお、全集版と別に進行するペーレンライター社の批判校訂版については既刊分のみ併記。

*注記における略号

Gossett-1980 : 『*The New Grove Dictionary of Music & Musicians* (新グローヴ音楽・音楽家事典)』(Macmillan, 1980.) のフィリップ・ゴセットによるロッシェニ作品目録（日本語版は対象外とする）。

Gossett-2001 : 前記事典の第2版（2001年）所収のフィリップ・ゴセットによるロッシェニ作品目録。

Rescigno : Eduardo Rescigno, *Dizionario rossiniano*, Biblioteca universale Rizzoli, Milano, 2002.

ROF : Rossini Opera Festival (ロッシェニ・オペラ・フェスティヴァル)

付記

最初に「日本語題名と原語表記によるロッシェニ・オペラ目録」を掲げる。これは筆者の結論を先に提示するもので、続いて個々の作品に関する批判的注釈で、なぜこうした結論に至ったかという理由もそこで説明している。なお、『ロッシニアーナ』の拙稿では今後これを採用するが、投稿者の表記を拘束するものではない。

本目録では「原作」「初版楽譜」「現行版」の項目を割愛した。その理由は次のとおり。

原作 : 従来文献の原作に関する情報に誤謬が多く、個別研究や全集版に基づく再構築が不可欠である（明確なケースは本誌連載のロッシェニ全作品事典で明らかにする）。

初版楽譜 : 近年の研究で初版データの修正が相次ぎ、全集版によって確定するケースが多いため（これについてもロッシェニ全作品事典で明らかにする）。

現行版 : 複製を含む書誌情報にはエディションや原本に関する注記も必要となり、ネット上に二次的・三次的な複製も存在し、同一原本の電子化とその複製を網羅するのはもはや不可能。ネット上の書誌情報には多数の誤りがあり、訂正にも限界がある。

以下、筆者の原則に基づくロッシェニ・オペラ目録を批判的注釈とともに掲載する。

日本語題名と原語表記によるロッシーニ・オペラ目録 (水谷彰良 編)

	日本語題名	題名の原語表記
1	デメトリオとポリーピオ	<i>Demetrio e Polibio</i>
2	結婚手形	<i>La cambiale di matrimonio</i>
3	ひどい誤解	<i>L'equivoco stravagante</i>
4	幸せな間違い	<i>L'inganno felice</i>
5	バビロニアのチーロ、またはバルダッサレの没落	<i>Ciro in Babilonia o sia La caduta di Baldassare</i>
6	絹のはしご	<i>La scala di seta</i>
7	試金石	<i>La pietra del paragone</i>
8	なりゆき泥棒	<i>L'occasione fa il ladro</i>
9	ブルスキーノ氏、または替え玉息子	<i>Il signor Bruschino ossia Il figlio per azzardo</i>
10	タンクレーディ	<i>Tancredi</i>
11	アルジェのイタリア女	<i>L'italiana in Algeri</i>
12	パルミラのアウレリアーノ	<i>Aureliano in Palmira</i>
13	イタリアのトルコ人	<i>Il turco in Italia</i>
14	シジスモンド	<i>Sigismondo</i>
15	イングランド女王エリザベッタ	<i>Elisabetta, regina d'Inghilterra</i>
16	トルヴァルドとドルリスカ	<i>Torvaldo e Dorliska</i>
17	セビーリヤの理髪師 註1	<i>Il barbiere di Siviglia</i>
18	新聞	<i>La gazetta</i>
19	オテッロ、またはヴェネツィアのムーア人	<i>Otello, ossia Il moro di Venezia</i>
20	ラ・チェネレントラ、または勝利した善良さ	<i>La Cenerentola, ossia La bontà in trionfo</i>
21	泥棒かかさぎ	<i>La gazza ladra</i>
22	アルミーダ	<i>Armida</i>
23	ブルグントのアデライデ	<i>Adelaide di Borgogna</i>
24	エジプトのモゼ	<i>Mosè in Egitto</i>
25	アディーナ	<i>Adina</i>
26	リッチャルドとゾライデ	<i>Ricciardo e Zoraide</i>
27	エルミオーネ	<i>Ermione</i>
28	エドゥアルドとクリスティーナ	<i>Eduardo e Cristina</i>
29	湖の女	<i>La donna del lago</i>
30	ビアンカとファッリエーロ、または三頭会議	<i>Bianca e Falliero o sia Il consiglio dei tre</i>
31	マオメット 2 世	<i>Maometto secondo</i>
32	マティルデ・ディ・シャブラン、または美女と鉄の心 註2	<i>Matilde di Shabran, o sia Bellezza, e cuor di ferro</i>
33	ゼルミーラ	<i>Zelmira</i>
34	セミラーミデ	<i>Semiramide</i>
35	ランスへの旅、または金の百合亭	<i>Il viaggio a Reims, ossia L'albergo del giglio d'oro</i>
36	コリントスの包囲	<i>Le siège de Corinthe</i>
37	モイーズ 註3	<i>Moise</i>
38	オリー伯爵	<i>Le comte Ory</i>
39	ギヨーム・テル	<i>Guillaume Tell</i>

註1 初演時の題名は「アルマヴィーヴァ、または無益な用心 *Almaviva, o sia L'inutile precauzione*」

註2 初演時の題名は「マティルデ・シャブラン、または美女と鉄の心 *Matilde Shabran, o sia Bellezza, e cuor di ferro*」

註3 初演時の題名は「モイーズとファラオン、または紅海横断 *Moise et Pharaon, ou Le passage de la Mer Rouge*」

批判的注釈を伴うロッシーニ・オペラ目録（水谷彰良 編）

1 デメトリオ*とポリービオ *Demetrio e Polibio*

劇区分：2幕のドランマ・セーリオ・ペル・ムジカ *dramma serio per musica* [in due atti] **

台本：ヴィンチェンツィーナ・ヴィガノ=モンベッリ (Vincenzina Viganò-Mombelli,?-?) *** イタリア語

初演：1812年5月18日 ローマ、ヴァッレ劇場 (Teatro Valle) **** 註：作曲は1810年*****

自筆楽譜：(未発見または消失。但し1曲のみ現存 [excerpt *PES*]) *****

全集版：I/1 (未成立)

* 従来の邦題表記は「デメトリオとポリービオ」であるが、イタリア人名のアクセントを反映させると *Demetrio* は「デメトリオ」となる (例：『伊和中辞典』第2版、小学館)。発音上は *-me* にアクセントがあり、*-trio* は一音節で作曲される (それゆえ日本人がカタカナの「トリオ」を普通に発音すると、本来の発音とは異なる)。物語の舞台は古代パルティア王国で物語は史実に立脚せず、このオペラのシリア王 *Demetrio* はマケドニア王デメトリオス2世またはその息子ピリッポス5世との関連が考えられるものの、明確な結びつきを示す劇の設定はない。ロッシーニは古代人の名前をイタリア語的なアクセントを置かず作曲するケースもあるが、他作曲家 (おそらくドメニコ・モンベッリ) の楽曲を多く含むこのオペラでは *De-me-trio* の3音節で発音されることから「デメトリオとポリービオ」の訳題を採用した。なお、役名の発音を考慮しなければ「デメトリオとポリービオ」も容認できるが、本目録の表記原則を逸脱することになる。

** 初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

*** 初版台本に作家名の記載無し。

**** *Teatro Valle* は一般名称 (以下、同)。初版台本の記載は *Teatro Valle de' Signori Capranica* (カプラーニカ夫妻のヴァッレ劇場)。

***** 作曲時期は Gossett-1980 まで「1809年以前」とされたが、Gossett-2001 で「1810年頃」と変更。その後 ROF2010 年の上演プログラムにおいて「1810年」と公式に訂正された。

***** 従来は未発見または消失だが、1曲の四重唱が再発見されロッシーニ財団の所蔵となったため追加。

2 結婚手形* *La cambiale di matrimonio*

劇区分：1幕のファルサ・コーミカ *farsa comica* [in un atto] **

台本：ガエターノ・ロッシ (Gaetano Rossi, 1774-1855) イタリア語

初演：1810年11月3日 ヴェネツィア、サン・モイゼ劇場 (*Teatro di San Moisè*) ***

自筆楽譜：(未発見または消失)

全集版：I/2 (未成立)

* 「婚約手形」の訳題もあるが、*matrimonio* を「結婚」とする「結婚手形」を採用。

** 初版台本は *farsa comica da rappresentarsi in musica* と記載。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

*** *Teatro di San Moisè* は一般名称 (以下、同)。初版台本は *Teatro Giustiniani in San Mosè* と記載。

3 ひどい誤解* *L'equivoco stravagante*

劇区分：2幕のドランマ・ジョコーゾ・ペル・ムジカ *dramma giocoso per musica* [in due atti] **

台本：ガエターノ・ガズバリ (Gaetano Gasbarri, 1770-1844) *** イタリア語

初演：1811年10月26日 ボローニャ、コルソ劇場**** (*Teatro del Corso*)

自筆楽譜：(未発見または消失)

全集版：I/3 (未成立)

* 「とんでもない誤解」の訳題も使われる。*stravagante* は「風変わりな」「奇妙な」を意味し、劇中でのヒロインに対する誤解は「ひどい」「とんでもない」「とてつもない」ものであることから、そのどれもが有効だが、ここでは従来そのまま「ひどい誤解」を採用した。

** 初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

*** *Gasbarri* の *s* が濁音となるため、カタカナでは「ガズバリ」と表記すべき。過去の文献に散見される *Gasparri* の表記は誤り。

生没年は不詳とされ、Rescigno にも記載がないが、現在は 1770 年生・1844 年没で確定している（ガズパッリの生涯に関する最新研究は Marco Beghelli, *Vita di Gaetano Gasbarri, librettista*. (in Bollettino del Centro rossiniano di studi., Anno XLIX., Fondazione G. Rossini, 2009., pp. 5-39. 参照)。

**** デル・コルソ劇場ともしうるが、スカラ座と同様、一般的な日本語表記を採用（7《試金石》参照）。

4 幸せな間違い* *L'inganno felice*

劇区分：1 幕のファルサ・ペル・ムジカ *farsa per musica* [in un atto] **

台本：ジュゼッペ・フォッパ (Giuseppe Foppa, 1760-1845) *** イタリア語

初演：1812 年 1 月 8 日 ヴェネツィア、サン・モイゼ劇場 (Teatro di San Moisè) ****

自筆楽譜：(未発見または消失)

全集版：I / 4 (未成立)

* 従来の訳題を採用したが、*inganno* は「欺瞞」「裏切り」「錯覚」など多様な意味で用いられ、「幸せな錯覚」など別な訳題もありうる。不貞の疑いをかけられて小舟で海に流され、死んだと思われていた妻イザベッラにそっくりな女性をベルトランド公爵が見つけるというのがドラマの発端で、彼女はその事実を隠し通すが、やがて公爵が自分の過ちを知って妻に詫言、イザベッラも夫を許すという内容。物語にびったりな訳題の選択は難しく、従来のまま「幸せな間違い」とした。

** 初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

*** 文献によっては Giuseppe Maria Foppa ともされるが、台本表記はすべて Giuseppe Foppa (以下、同)。

**** 初版台本は Teatro Giustiniani in San Mosè と記載。

5 バビロニアのチーロ、またはバルダッサレの没落* *Ciro in Babilonia o sia La caduta di Baldassare*

劇区分：2 幕のドラマ・コン・コーリ・ペル・ムジカ *dramma con cori per musica* [in due atti] **

台本：フランチェスコ・アヴェンティ (Francesco Aveni, 1779-1858) *** イタリア語

初演：1812 年 3 月 14 日 フェッラーラ、コムナーレ劇場 (Teatro Comunale)

自筆楽譜：未発見

全集版：I / 5 (未成立)

* この訳題は 2 人の登場人物の役名の発音に基づくが、どちらも旧約聖書の『ダニエル書』に登場し、Ciro はペルシア王キュロス [2 世]、Baldassare (イタリア語の通常表記は Baldassar) は新バビロニア王ベルシャザル (Belshazzar [プロテスタントとカトリックの新共同訳の聖書ではベルシャツアルとする]) であることから、これを充てると「バビロニアのキュロス、またはベルシャザルの没落」となる。とはいえ登場人物のイタリア語の呼称と歴史・伝説上の人物の日本語での一般名称のどちらを採用するかは作品ごとの不統一を避けるために一元化する必要があり、日本語の一般名称を採用するとモーセもしくはモーゼを主役とする二つのオペラ (24《エジプトのモゼ》、37《モイーズ》) の項で説明する問題を生じることから、本目録では役名の発音に基づく題名表記を原則的に採用する。なお、一般的な題名表記では o sia 以下を省略して単独に「バビロニアのチーロ *Ciro in Babilonia*」としうる。

** 初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。なお、ドラマ・コン・コーリは「合唱を伴う劇」の意味。

*** 初版台本は名前をイニシャルにして F.A.ferrarese (フェッラーラ人 F.A.) と記載。

6 絹のはしご* *La scala di seta*

劇区分：1 幕のファルサ・コーミカ *farsa comica d'un atto solo* **

台本：ジュゼッペ・フォッパ (Giuseppe Foppa, 1760-1845) イタリア語

初演：1812 年 5 月 9 日 ヴェネツィア、サン・モイゼ劇場 (Teatro di San Moisè) ***

自筆楽譜：*S-Smf*

全集版：I / 6 (Anders Wiklund 校訂, Fondazione Rossini Pesaro, 1991.)

* 「絹のきざはし」の訳題もあったが、「きざはし」の語そのものが死語化しつつあり、また原題の *scala* は階段ではなく「はしご」を意味する。「はしご」の漢字「梯子」「梯」も一般的でなくなりつつあるので従来どおり「絹のはしご」とした。

** 初版台本に準拠。一般的な表記法では *farsa comica in un atto* となる。

*** 初版台本は Teatro Giustiniani in San Mosè と記載。

7 試金石 *La pietra del paragone*

劇区分：2幕のメロドラマ・ジョコーゾ melodramma giocoso in due atti *

台本：ルイーダ・ロマネッリ (Luigi Romanelli, 1751-1839) イタリア語

初演：1812年9月26日 ミラーノ、スカラ座 (Teatro alla Scala) **

自筆楽譜：*I-Mr*

全集版：I/7 (未成立)

* 初版台本に準拠。

** 現在の Teatro alla Scala は一般名称 (以下、同)。初版台本は「王の」「王立」を表す Regio の略号 R.^oを伴い、R.^o Teatro alla Scala と記載。なお、本目録では劇場の名称に関して基本的に Teatro に「劇場」を当てたが、日本語の「スカラ座」が固有名詞として定着しているためこれを例外とする (以下、同)。イタリアでは一般に La Scala (ラ・スカーラ) でこの劇場を指し、「ラ・」を伴う「ラ・スカーラ座」「ラ・スカーラ劇場」もありうるが、一般的な日本語表記「スカラ座」のままとする (フェニーチェ劇場も同様。10《タンクレーディ》参照)。

8 なりゆき泥棒* *L'occasione fa il ladro*

劇区分：1幕のブルレッタ・ペル・ムジカ burletta per musica [in un atto] **

台本：ルイーダ・プリヴィダーリ (Luigi Privaldi, ?-?) *** イタリア語

初演：1812年11月24日 ヴェネツィア、サン・モイゼ劇場 (Teatro di San Moisè) ****

自筆楽譜：*F-Pc*

全集版：I/8 (Giovanni Carli Ballora, Patricia Brauner, Philip Gossett 校訂, Fondazione Rossini Pesaro, 1994.)

* 題名を *L'occasione fa il ladro, ossia Il cambio della valigia* とする文献もあるが、初演時の題名ではない。原作はウジェーヌ・スクリーブの喜劇『*Le Prétendu par hasard, ou L'occasion fait le larron* (思いがけぬ花婿、またはなりゆき泥棒)』で、ロッシーニ作品の題名 *L'occasione fa il ladro* は原作の題名にあるフランス語のことわざ *L'occasion fait le larron* (「機会が泥棒を作り出す」「機会が悪事に駆り立てる」といった意味) のイタリア語訳に当たる。「なりゆき」を「成行き」「成り行き」とするのは書き手の選択肢だが、ここでは「なりゆき」のまま「なりゆき泥棒」とした。

** 初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

*** ネット上の記載に生没年を 1771-1844 とするケースもあるが、疑問の余地があるので採用しない。

**** 初版台本は Teatro Giustiniani in San Moisè と記載 (前記三つのファルサ台本と異なり、Mosè に i を含む Moisè)。

9 ブルスキーノ氏、または替え玉息子 *Il signor Bruschino ossia Il figlio per azzardo* *

劇区分：1幕のファルサ・ジョコーザ・ペル・ムジカ farsa giocosa per musica [in un atto] **

台本：ジュゼッペ・フォッパ (Giuseppe Foppa, 1760-1845) イタリア語

初演：1813年1月27日 ヴェネツィア、サン・モイゼ劇場 (Teatro di San Moisè) ***

自筆楽譜：*F-Pc*

全集版：I/9 (Arrigo Gazzaniga 校訂, Fondazione Rossini Pesaro, 1986.)

* 一般的な題名表記では *ossia* 以下を省略して単独に「ブルスキーノ氏 *Il signor Bruschino*」と示す。

** 初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

*** 初版台本は Teatro Giustiniani in San Moisè と記載 (前作と同様、i を含む Moisè)。

10 タンクレーディ *Tancredi*

劇区分：2幕のメロドラマ・エローイコ melo-dramma eroico [in due atti] *

台本：ガエターノ・ロッシ (Gaetano Rossi, 1774-1855) ** イタリア語

初演：1813年2月6日 ヴェネツィア、フェニーチェ劇場 (Teatro La Fenice) ***

自筆楽譜：*I-Ms, excerpts B-Bmichotte, private collection*

全集版 : I / 10 (Philip Gossett 校訂, Fondazione Rossini Pesaro, 1984.)

* melo-dramma の綴りも含めて初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

** フェッラーラ版 (悲劇的フィナーレ版) の変更テキストはルイーダ・レーキ (Luigi Lechi, 1786-1867)。なお、レーキの生没年は Rescigno その他に記載がなく、不明とされていたが、*Dizionario Biografico degli Italiani*, Vol. 64., 2005. の項目「Lechi, Luigi」において月日も含めて明らかにされている。

*** 現在の Teatro La Fenice は一般名称 (以下、同)。初版台本は頭に「大」を表す Gran を伴い Gran Teatro La Fenice と記載。なお、厳密には「ラ・」を伴う「ラ・フェニーチェ劇場」だが、「スカラ座」と同様 (7《試金石》参照) 本目録では一般的な日本語表記「フェニーチェ劇場」を採用する (以下、同)。

11 アルジェのイタリア女 *Litaliana in Algeri*

劇区分 : 2 幕のドラランマ・ジョコーゾ・ペル・ムジカ *dramma giocoso per musica* [in due atti] *

台本 : アンジェロ・アネッリ (Angelo Anelli, 1761-1820) がルイーダ・モスカのために書いた同題の台本 (1808 年) を不詳の作家が借用して改作** イタリア語

初演 : 1813 年 5 月 22 日 ヴェネツィア、サン・ベネデット劇場 (Teatro di San Benedetto) ***

自筆楽譜 : *I-Mr*; excerpt *Ms*

全集版 : I / 11 (Azio Corghi 校訂, Fondazione Rossini Pesaro, 1981.)

* 初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

** 初版台本に作家名の記載無し。

*** 初版台本は Teatro a S. Benedetto と記載。

12 パルミラ*の 아우レリアーノ** *Aureliano in Palmira*

劇区分 : 2 幕のドラランマ・セーリオ・ペル・ムジカ *dramma serio per musica* [in due atti] ***

台本 : フェリーチェ・ロマーニ (Felice Romani, 1788-1865) **** イタリア語

初演 : 1813 年 12 月 26 日 ミラーノ、スカラ座 (Teatro alla Scala) *****

自筆楽譜 : *B-Bnichotte* (frag.)

全集版 : I / 12 (未成立)

* 従来表記の「パルミーラ」はイタリア語の地名に基づき、理論的には不適切のため古代シリアの地名「パルミラ」に改める。現地語の「タドモル」は一般的でなく、原題表記からも遠ざかるため採用しない。

** 「アウレリアーノ」は役名のイタリア語読み。当該人物は史実のローマ皇帝ルキウス・ドミティウス・アウレリアヌス (Lucius Domitius Aurelianus, 214 または 215-275) であることからこれを充てると「パルミラの アウレリアヌス」となるが、本目録の原則として役名の発音を採用する。

*** 初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

**** 初版台本では G.F.R のイニシャルのみのため、かつては G.-F. ロマネッリとの誤解を生じたが、その後フェリーチェ・ロマーニと改められた。

***** 初版台本は Regio の略号 R. を伴い R. Teatro alla Scala と記載。

13 イタリアのトルコ人* *Il turco in Italia*

劇区分 : 2 幕のドラランマ・ブッフオ・ペル・ムジカ *dramma buffo per musica* in due atti**

台本 : フェリーチェ・ロマーニ (Felice Romani, 1788-1865) *** イタリア語

初演 : 1814 年 8 月 14 日 ミラーノ、スカラ座 (Teatro alla Scala) ****

自筆楽譜 : *I-Mr*

全集版 : I / 13 (Margaret Bent 校訂, Fondazione Rossini Pesaro, 1988.)

* 11 《アルジェのイタリア女》の例に倣えば *Il turco* は「トルコ男」となるが、従来どおり「トルコ人」とした。

** 初版台本に準拠。

*** 初版台本に作者名の記載無し。

**** 初版台本は Regio の略号 R. を伴い R. Teatro alla Scala と記載。

14 シジスモンド *Sigismondo* *

劇区分：2幕のドランマ・ペル・ムジカ *dramma per musica* [in due atti] **

台本：ジュゼッペ・フォッパ (Giuseppe Foppa, 1760-1845) イタリア語

初演：1814年12月26日 ヴェネツィア、フェニーチェ劇場 (Teatro La Fenice) ***

自筆楽譜：*Mr*

全集版：I / 14 (Paolo Pinamonti 校訂, Fondazione Rossini Pesaro, 2010.)

* 台本作家フォッパは、主役に歴史上のポーランド王ジグムント Zygmunt (16~17世紀に1世 (1467-1548)、2世 (1520-1572)、3世 (1566-1632) と3代のジグムント王がいる) のイタリア名 Sigismondo を採用したが、時代設定が不明で史実に合致する要素が無く、本目録の原則からも役名の発音に準拠。

** 初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

*** 初版台本は Gran Teatro La Fenice と記載。

15 イングランド女王エリザベッタ* *Elisabetta, regina d'Inghilterra*

劇区分：2幕のドランマ・ペル・ムジカ *dramma per musica* [in due atti] **

台本：ジョヴァンニ・シュミット (Giovanni Schmidt, 1775-1839) イタリア語

初演：1815年10月4日 ナポリ、サン・カルロ劇場 (Teatro San Carlo) ***

自筆楽譜：*PESr*

全集版：I / 15 (未成立)

* *Inghilterra* は通例「イギリス」「英国」と訳されるので従来表記は「イギリス女王エリザベッタ」だが、題名の *Inghilterra* は *Regno d'Inghilterra* の略称で、その訳語は「イングランド王国」となるので「イングランド」を採用した。主人公は史実の女王エリザベス1世のためこれを充てると「イングランド女王エリザベス」となるが、本目録の原則では採用しえない。なお、*Elisabetta, regina d'Inghilterra* の語順どおり「エリザベッタ、イングランド女王」とする表記法は、題名に二人の人物があるとの誤解を招くので本目録では採用しない。

** 初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

*** Teatro San Carlo は一般名称 (以下、同)。初版台本は、「王の」「国王の」を表す Real [Reale] を伴い Real Teatro di S. Carlo と記載。

16 トルヴァルドとドルリスカ *Torvaldo e Dorliska*

劇区分：2幕のドランマ・セミセーリオ *dramma semiserio* [in due atti] *

台本：チェーザレ・ステルビーニ (Cesare Sterbini, 1783-1831) ** イタリア語

初演：1815年12月26日 ローマ、ヴァッレ劇場 (Teatro Valle) ***

自筆楽譜：*F-Pc*

全集版：I / 16 (Francesco Paolo Russo 校訂, Fondazione Rossini Pesaro, 2007.)

* 初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

** 従来文献は生年を1784年としたが、洗礼簿の調査により誕生日が1783年10月29日と判明 (以下、同)。

*** 初版台本の記載は Teatro Valle degl'illustrissimi Signori Capranica (令名高きカブラーニカ夫妻のヴァッレ劇場)。

17 セビーリヤの理髪師* *Il barbiere di Siviglia* [アルマヴィーヴァ、または無益な用心 *Almaviva, o sia L'inutile precauzione*] **

劇区分：2幕のドランマ・コーミコ [dramma comico in due atti] ***

台本：チェーザレ・ステルビーニ (Cesare Sterbini, 1783-1831) イタリア語

初演：1816年2月20日 ローマ、アルジェンティーナ劇場 (Teatro Argentina) ****

自筆楽譜：*I-Bc*

全集版：I / 17 (Alberto Zedda 校訂, Fondazione Rossini Pesaro - Ricordi****, 2009.)

* 題名の Siviglia はスペインの地名 Sevilla を指す。現在日本で使われるオペラの訳題ではこの地名が「セビリア」「セヴィリア」「セヴィリヤ」「セヴィラ」「セビリヤ」とされるが、Sevilla は日本のスペイン語辞典や地名辞典で「セビーリヤ」の表記が採用される（例：『西和中辞典』小学館、『コンサイス外国地名事典 改訂版』三省堂）。それゆえ地名のカタカナへの置き換えに一定の基準を設ける本目録では、「セビーリヤ」を採用する（筆者が従来「セビーリヤの理髪師」もしくはその略記「セビリヤの理髪師」を用いた理由もそこにある）。

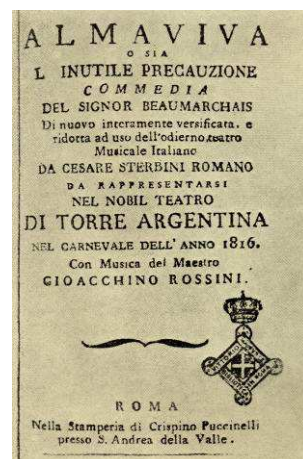
** 初版台本の題名は「アルマヴィーヴァ、または無益な用心 *Almaviva, o sia L'inutile precauzione*」だが、再演以後「セビーリヤの理髪師 *Il barbiere di Siviglia*」として流布した。ペーレンライター批判校訂版と全集版は背表紙で *Il barbiere di Siviglia* とし、タイトル頁はどちらも *Il barbiere di Siviglia* に続けて [] もしくは () 内に *Almaviva, o sia L'inutile precauzione* と付記している。それゆえ初演時の特例を除く一般的な題名表記では、「セビーリヤの理髪師」として問題は無い。

*** 従来文献、ペーレンライター批判校訂版、全集版はすべて「2 幕のコンメーディア *commedia in due atti*」もしくは「チェーザレ・ステルビーニの 2 幕のコンメーディア *commedia in due atti di Cesare Sterbini*」とする。しかし、これは初版台本における「*commedia del signor Beaumarchais di nuovo interamente versificata, e ridotta ad uso dell'odierno teatro Musicale Italiano da Cesare Sterbini romano*」の要約であり、本来は「ボーマルシェ氏のコンメーディア」をステルビーニが改作したことを意味し、このオペラの劇台本の区分名称とはしえない。ステルビーニは初版台本の緒言（*Avvertimento al pubblico*）の中で明瞭に「セビーリヤの理髪師、または無益な用心」と題されたボーマルシェ氏の喜劇を「アルマヴィーヴァ、または無益な用心」の題名を持つドラマ・コメディに変更してローマで上演する」[註]と述べており、台本作家にとっての劇区分名称が「ドラマ・コメディ」であるのは明白である。したがって従来表記は批判校訂版と全集版とともに不正確かつ不適切で、筆者は緒言に基づく「ドラマ・コメディ」を正式な区分名称として提唱したい。

**** Teatro Argentina は一般名称（以下、同）。初版台本は Nobile Teatro di Torre Argentina と記載。

***** このエディションのみ「Ricordi」と付記。

註：原文は「*La commedia del signor Beaumarchais intitolata Il barbiere di Siviglia, o sia L'inutile precauzione si rappresenta in Roma ridotta a drama comico col titolo di Almaviva, o sia L'inutile precauzione*」



《アルマヴィーヴァ、または無益な用心》と題された初版台本

18 新聞* *La gazzetta*

劇区分：2 幕のドラマ・ペル・ムジカ *dramma per musica [in due atti]* **

台本：ジュゼッペ・パロンバ (Giuseppe Palomba, ?-?) イタリア語

初演：1816 年 9 月 26 日 ナポリ、フィオレンティーニ劇場 (Teatro dei Fiorentini) ***

自筆楽譜：Nc

全集版：I / 18 (Philip Gossett e Fabrizio Scipione 校訂, Fondazione Rossini Pesaro, 2002.)

* *la gazzetta* は一般的な意味での「新聞」を意味するのでそのまま邦題とした。ときに見られる「新聞 (ガッゼッタ)」「ガッゼッタ (新聞)」の二重表記は無意味。

** 初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

*** Teatro dei Fiorentini は一般名称。初版台本は Teatro de' Fiorentini と記載。

19 オテッロ*、またはヴェネツィアのムーア人** *Otello, ossia Il moro di Venezia*

劇区分：3 幕のドラマ・ペル・ムジカ *dramma per musica [in tre atti]* ***

台本：フランチェスコ・ベリオ・ディ・サルサ (Francesco Berio di Salsa, 1765-1820) **** イタリア語

初演：1816 年 12 月 4 日 ナポリ、フォンド劇場 (Teatro del Fondo) *****

自筆楽譜：PESr

全集版：I / 19 (Michael Collins 校訂, Fondazione Rossini Pesaro, 1994.)

* しばしば見られる「オテロ」「オセロ」「オセロー」の訳題はシェイクスピアの原作やヴェルディのオペラの従来表記と関連したもので、役名の発音に即した原則では「オテッロ」以外にありえない（二重音 II を考慮して小さな「ル」を用いる表記は本目録に採用しない。以下、同）。

** moro [伊] は、古くは北西アフリカのイスラム教徒（主にベルベル人）を指し、8 世紀にイベリア半島を侵略した彼らが原住民

から「モーロ」と呼ばれたことから「モロ」「モーロ」の表記も与えられる。けれどもシェイクスピア時代の Moor [英] は人種上のムーア人と共に肌の黒い「黒人」の意味でも使われ、シェイクスピアも後者に解したらしくオセローをイスラム教徒と思わせる台詞は原作に無い。ロッシーニのオペラ台本も同様なので「ヴェネツィアの黒人」とすることも可能だが、肌の色に起因する差別的な意味合い避けるため「ムーア人」を採用する（なお、11《アルジェのイタリア女》の例に倣えば *Il moro* は「ムーア男」となるが、従来どおり「ムーア人」とした）。一般的な題名表記では *ossia* 以下を省略して「オテッロ *Otello*」とする。

*** 初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

**** 初版台本に作家名の記載無し。

***** Teatro del Fondo は一般名称。デル・フォンド劇場ともしうるが、スカラ座と同様一般的な日本語表記を採用した（3《ひどい誤解》におけるコルソ劇場との整合性も考慮しての選択）。初版台本は Real [Reale] を伴い Real Teatro del Fondo と記載。

20 ラ・チェネレントラ、または勝利した善良さ* *La Cenerentola*** , *ossia La bontà in trionfo*

劇区分：2 幕のドランマ・ジョコーゾ *dramma giocoso* [in due atti] ***

台本：ヤーコポ・フェッレッティ (Jacopo Ferretti****,1784-1852) イタリア語

初演：1817 年 1 月 25 日 ローマ、ヴァッレ劇場 (Teatro Valle) *****

自筆楽譜：*Baf*

全集版：I / 20 (Alberto Zedda 校訂,Fondazione Rossini Pesaro,1998.)

* ヒロインの劇中の呼称は *Cenerentola* で定冠詞を伴わないが、題名の原語表記は固有名詞の *La Cenerentola* であることから、訳題に「ラ・」を伴う「ラ・チェネレントラ」を採用した。なお、彼女が事実上おとぎ話のシンデレラであるとしても、「シンデレラ」はイタリア・オペラの題名としては不適切。*La bontà in trionfo* には複数の訳があるが、ここでは直訳に近い「勝利した善良さ」を採用する。一般的な題名表記では *ossia* 以下を省略して「ラ・チェネレントラ *La Cenerentola*」とする。

** *Cenerentola* の頭文字 C は固有名詞として大文字を使用（小文字では普通名詞となる）。

*** 初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

**** 初版台本は Giacomo Ferretti と記載。

***** 初版台本は Teatro Valle degl'Illustrissimi Sig [sic] Capranica（令名高きカブラーニカ氏 [夫妻] のヴァッレ劇場）と記載。

21 泥棒かささぎ* *La gazza ladra*

劇区分：2 幕のメロドランマ *melodramma* [in due atti] **

台本：ジョヴァンニ・ゲラルディーニ (Giovanni Gherardini,1778-1861) *** イタリア語

初演：1817 年 5 月 31 日 ミラーノ、スカラ座 (Teatro alla Scala) ****

自筆楽譜：*Mr*

全集版：I / 21 (Alberto Zedda 校訂,Fondazione Rossini Pesaro,1979.)

* 「どろぼうかささぎ」も使用されるが、すべてひらがなとすることには違和感があり、8《なりゆき泥棒》も考慮して従来の「泥棒かささぎ」を採用した。但し、「盗むかささぎ」の方が原意に近い訳題である。なお、鳥類に限らず自然科学の分野ではカタカナ表記のカササギが一般的だが、オペラの題名にこれを踏襲する必要があるとはいえ、漢字の和名「鵲」のひらがなへの置き換えとして「かささぎ」のままとした。

** 初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

*** 初版台本に作家名の記載無し。

**** 初版台本は「王立・帝立」を表す *Regio Imperiale* の略号 R.I.を伴い R.I.Teatro alla Scala と記載。

22 アルミーダ *Armida*

劇区分：3 幕のドランマ・ペル・ムジカ *dramma per musica* [in tre atti] *

台本：ジョヴァンニ・シュミット (Giovanni Schmidt,1775-1839) イタリア語

初演：1817 年 11 月 9 日 ナポリ、サン・カルロ劇場 (Teatro San Carlo) **

自筆楽譜：*PESr; excerpt Baf*

全集版：I / 22 (Charles S.Brauner e Patricia Brauner 校訂,Fondazione Rossini Pesaro,1997.)

* 初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

** 初版台本は Real Teatro di S. Carlo と記載。

23 ブルグント*のアデライデ** *Adelaide di Borgogna*

劇区分：2 幕のドランマ・ペル・ムジカ *dramma per musica* [in due atti] ***

台本：ジョヴァンニ・シュミット (Giovanni Schmidt, 1775-1839) **** イタリア語

初演：1817 年 12 月 27 日 ローマ、アルジェンティーナ劇場 (Teatro Argentina) *****

自筆楽譜：(未発見または消失)

全集版：I / 23 (未成立)

* 従来の題名表記では地名 *Borgogna* がイタリア語読みそのまま「ボルゴニーヤ」とされたが、台本作者シュミットは一定の史実を考慮して劇を設定し、ルドルフ 2 世 (Rudolphe II [Rodolfo II di Borgogna (伊)], ?- 937) が即位して 933 年に建国した新たなブルグント王国の物語とした。それゆえ *Borgogna* を「ボルゴニーヤ」としたり、現在のフランスの地名「ブルゴニユ」に置き換えるのは不適切で、「ブルグント」を採用すべき。なお、原語表記をカタカナにする「アデライデ・ディ・ボルゴニーヤ」は、これがそのまま人物名との誤解を招くので採用しえない。

** *Adelaide* のイタリア語の発音のアクセントは *-lai* にあるので「アデライーデ」は誤り。

*** 初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

**** 初版台本に作家名の記載無し。

***** 初版台本は *Nobil Teatro a Torre Argentina* と記載。

24 エジプトのモゼ* *Mosè in Egitto*

劇区分：3 幕のアツィオーネ・トラージコ=サークラ *azione tragico-sacra* [in tre atti] **

台本：アンドレア・レオーネ・トットラ (Andrea Leone Tottola, ?-1831) イタリア語

初演：1818 年 3 月 5 日 ナポリ、サン・カルロ劇場 (Teatro San Carlo) ****

自筆楽譜：*F-Pc*

全集版：I / 24 (Charles S. Brauner 校訂, Fondazione Rossini Pesaro, 2004.)

* 「モゼ」は役名の発音に基づき、本目録の原則ではこれ以外の表記はありえない。ちなみに旧約聖書に書かれたこの歴史上の人物のヘブライ語における発音は「モーシェ」で、日本語の聖書における「モーセ」や一般的な「モーゼ」の 2 種が流布したため「エジプトのモーセ」「エジプトのモーゼ」の日本語題名も使われたが、前記の理由で採用し得ない（この問題については下記 37 《モイーズ》の注釈も参照されたい）。

** 初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

*** 生年は特定されない。「1770 以前」とする文献もあるが、推測の域を出ない（以下、同）。

**** 初版台本は *Real Teatro di S. Carlo* と記載。

25 アディーナ *Adina**

劇区分：1 幕のファルサ [*farsa in un atto*] [*farça em 1 acto*] **

台本：ゲラルド・ベヴィラクワ・アルドブランディーニ (Gherardo Bevilacqua Aldobrandini, 1791-1845) *** イタリア語

初演：1826 年 6 月 12 日 **** リスボン、サン・カルロス劇場 (Theatro de São Carlos) *****

註：作曲は 1818 年

自筆楽譜：*I-PESr*

全集版：I / 25 (Fabrizio Della Seta 校訂, Fondazione Rossini Pesaro, 2000.)

* Gossett-2001 の *Adina, o Il califfo di Bagdad* や従来文献の *Adina, ossia Il califfo di Bagdad* は初版台本に基づかず、全集版でしりぞけられた。

** 初版台本の記載は *farça em 1 acto* であるが、ロッシーニと台本作家は初演に関与せず、初版台本のタイトル記載も上演する側がポルトガル語で作成したものと思われる。アルドブランディーニの台本原本が現存せず、正確な劇区分は不明ながら、全集版はイタリア語の *farsa in un atto* を採用しており、本目録もこれを踏襲して初版台本の記載を併記した（厳密を記してどちらも [] 内とした）。

*** 初版台本に作家名の記載無し。

**** 多くの文献が採用した6月22日が誤りであることは、全集版で明らかにされた。

***** Theatro de São Carlos は一般名称。初版台本は Real Theatro de S.Carlos と記載。

26 リッチャルドとゾライデ* *Ricciardo e Zoraide*

劇区分：2幕のドランマ *dramma [in tre atti]* **

台本：フランチェスコ・ベリオ・ディ・サルサ (Francesco Berio di Salsa, 1765-1820) *** イタリア語

初演：1818年12月3日 ナポリ、サン・カルロ劇場 (Teatro San Carlo) ****

自筆楽譜：Nc

全集版：I / 26 (未成立)

* 楽譜から判断しうる Zoraide の発音は-rai-を1音節とする Zo-rai-de (演奏上の必要から ra を延ばす場合もある)。それゆえ、i に音引きを適用する従来の「ゾライデ」は誤りとして採用しない。なお、語頭の z は発音の際に [dz] (濁音) と [ts] (清音) の2種があり、語によっては標準発音がどちらかに決まっているケースもあるが (例：地名 Lazio は清音が標準発音)、古代エジプト南部のヌビアを舞台とするこのオペラの登場人物 Zoraide は18世紀に出版された原作の叙事詩に起因し、発音上の決まりもない。それゆえ上演の際に Zo を清音にして「ツォライデ」とも発音されるが、本目録では従来の濁音表記を採用する。なお、本目録では「ヅ」を用いず濁音 Zo [dzo] に「ヅ」、濁音 Ze [dze/ dze] に「ゼ」を充てる。

** 初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

*** 初版台本に作家名の記載無し。

**** 初版台本は Real Teatro di S. Carlo と記載。

27 エルミオーネ *Ermione*

劇区分：2幕のアツィオーネ・トラージカ *azione tragica [in due atti]* *

台本：アンドレア・レオーネ・トットラ (Andrea Leone Tottola, ?-1831) ** イタリア語

初演：1819年3月27日 ナポリ、サン・カルロ劇場 (Teatro San Carlo) ***

自筆楽譜：F-Po, excerpt I-PES

全集版：I / 27 (Patricia B. Brauner / Philip Gossett 校訂, Fondazione Rossini, Pesaro, 1995.)

* 初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

** 初版台本の作者記載は A.L.T のイニシャルのみ。

*** 初版台本は Real Teatro di S. Carlo と記載。

28 エドואルドとクリスティーナ *Eduardo e Cristina*

劇区分：2幕のドランマ・ペル・ムジカ *dramma per musica in due atti* **

台本：ジョヴァンニ・シュミット (Giovanni Schmidt, 1775-1839) の台本をアンドレア・レオーネ・トットラ (Andrea Leone Tottola, ?-1831) とゲラルド・ベヴィラクワ・アルドブランディーニ (Gherardo Bevilacqua Aldobrandini, 1791-1845) が改作*** イタリア語

初演：1819年4月24日 ヴェネツィア、サン・ベネデット劇場 (Teatro di San Benedetto) ****

自筆楽譜：(未発見または消失。《ブルグントのアデライデ》《エルミオーネ》《リッチャルドとゾライデ》の楽曲を中心に、他のオペラの素材も使って構成したため、まとまった自筆楽譜は存在しない)

全集版：I / 28 (未成立)

* Edoardo (エドアルド) とする文献は誤り。

** 初版台本に準拠。単に *dramma* とするのは誤り。

*** 初版台本の作者記載は3人の作家 (トットラ、シュミット、ベヴィラクワ) のイニシャル T.S.B. であるが、原作の台本作家と改作者の関係を明白にすれば上記のようになる。

**** 初版台本は Teatro di S. Benedetto と記載。

29 湖の女* *La donna del lago*

劇区分：2幕のメロドラマ *melo-dramma* [in due atti] **

台本：アンドレア・レオーネ・トットラ (Andrea Leone Tottola, ?-1831) ** イタリア語

初演：1819年10月24日 ナポリ、サン・カルロ劇場 (Teatro San Carlo) ***

自筆楽譜：*PESr*

全集版：I / 29 (H. Colin Slim 校訂, Fondazione Rossini Pesaro, 1990.)

* スコット原作の物語詩『湖の女 (*The Lady of the Lake*)』(1810年5月エディンバラ刊)の訳題「湖上の美人」が英文学書や事典に定着し、オペラ文献でも踏襲されてきた(原作の明治期の訳題は「湖上之美人」、昭和11年初版の岩波文庫は「湖の麗人」)。しかし、オペラの訳題は「湖の女」が適正である(筆者は便宜上スコット原作を「湖上の美人」と表記して区別するが、これは個人的な選択である)。

** 初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

*** 初版台本は Real Teatro S. Carlo と記載。

30 ビアンカとファッリエーロ、または三頭会議* *Bianca e Falliero o sia Il consiglio dei tre*

劇区分：2幕のメロドラマ *melodramma* [in due atti] **

台本：フェリーチェ・ロマーニ (Felice Romani, 1788-1865) イタリア語

初演：1819年12月26日 ミラーノ、スカラ座 (Teatro alla Scala) ***

自筆楽譜：*Mr*

全集版：I / 30 (Gabriele Dotto 校訂, Fondazione Rossini, Pesaro, 1996.)

* *Il consiglio dei tre* を「三人評議会」や「三人委員会」とする選択肢もあるが、当初採用した「三頭会議」のままとし、17世紀ヴェネツィアの政体やドラマに沿った適訳があれば後日改めたい。なお、一般的な題名表記では *o sia* 以下を省略して「ビアンカとファッリエーロ *Bianca e Falliero*」としうる。

** 初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

*** 初版台本は Regio Teatro alla Scala と記載。

31 マOMETT 2世* *Maometto secondo*

劇区分：2幕のドラマ・ペル・ムジカ *dramma per musica* [in due atti] **

台本：チェーザレ・デッラ・ヴァッレ (Cesare Della Valle, 1777-1860) *** イタリア語

初演：1820年12月3日 ナポリ、サン・カルロ劇場 (Teatro San Carlo) ****

自筆楽譜：*I-PESr*(inc.), excerpt *GR-Lbl, US-NYp*

全集版：I / 31 (未成立)

* 役名の発音に準拠。「マOMETT 2世」の訳題も使われるが、ここでのマOMETTは日本人がこの名称で想起するイスラム教の開祖(ムハンマド)ではなく、15世紀オスマン帝国のスルタン、メフメト2世であることから「マOMETT 2世」は不適切で、役名の発音からも「マOMETT 2世」とすべき(なお、史実の人物の日本語表記をそのまま採用すべきと主張する者は、題名を「メフメト2世」としなければならなくなる)。

** 初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

*** 初版台本に作家名の記載無し。生年を1778年とする文献(例：*Rescigno*)は誤り。

*** 初版台本は Real Teatro S. Carlo と記載。

32 マティルデ・ディ・シャブラン、または美女と鉄の心 *Matilde di Shabran, o sia Bellezza, e cuor di ferro* [マティルデ・シャブラン、または美女と鉄の心 *Matilde Shabran, o sia Bellezza, e cuor di ferro*]*

劇区分：2幕のメロドラマ・ジョコーゾ *melodramma giocoso* [in due atti] **

台本：ヤーコポ・フェッレッティ (Jacopo*** Ferretti, 1784-1852) イタリア語

初演：1821年2月24日 ローマ、アポロ劇場 (Teatro Apollo) ****

自筆楽譜：*B-Bmichotte*

全集版：I / 32 (未成立)

* 初演時の題名は *Matilde Shabran, o sia Bellezza, e cuor di ferro*。ロッシーニの関与した最初の再演 (1821 年ナポリのフォンド劇場) では「美女と鉄の心 *Bellezza e cuor di ferro*」とされ、次の再演で *Matilde di Shabran, o sia Bellezza, e cuor di ferro* となった。その後は *Matilde Shabran* と *Matilde di Shabran* の双方が題名に使われ、ロッシーニの関与したヴィーン初演 (1822 年) では「コッラディーノ *Corradino*」と改題されている。本目録ではリコルディ社の初版楽譜と全集版の出版計画に沿って *Matilde di Shabran, o sia Bellezza, e cuor di ferro* を採用し、*Matilde Shabran, o sia Bellezza, e cuor di ferro* を初演ヴァージョンの題名として二次的な位置づけとする (ちなみに初演時のヒロインの役名は *Matilde di Shabran* である)。なお、*o sia* を *ossia* とする文献もあるが、初演と初期上演は *o sia* である。一般的な題名表記では *o sia* 以下を省略して「マティルデ・ディ・シャブラン *Matilde di Shabran*」としうる。

** 初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

*** 初版台本は Giacomo (ジャコモ) と記載。

**** Teatro Apollo は一般名称。初版台本は Teatro di Apollo と記載。

33 ゼルミーラ* *Zelmira*

劇区分：2 幕のドランマ・ペル・ムジカ *dramma per musica* [in due atti] **

台本：アンドレア・レオーネ・トットラ (Andrea Leone Tottola, ?-1831) イタリア語

初演：1822 年 2 月 16 日 ナポリ、サン・カルロ劇場 (Teatro San Carlo) ***

自筆楽譜：*F-Pc*

全集版：I / 33 (Helen Greenwald e Kathleen Kuzmick Hansell 校訂, Fondazione Rossini, Pesaro, 2005.)

* 本目録では原則として濁音 *Zo* [dzo] に「ゾ」、濁音 *Ze* [dze/ dze] に「ゼ」を充てるため「ゼルミーラ」となる (関連事項は 26 《リッチャルドとゾライデ》参照)。

** 初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

*** 初版台本は Real Teatro S. Carlo と記載。

34 セミラーミデ* *Semiramide*

劇区分：2 幕のメロドランマ・トラージコ *melo-dramma tragico* [in due atti] **

台本：ガエターノ・ロッシ (Gaetano Rossi, 1774-1855) イタリア語

初演：1823 年 2 月 3 日 ヴェネツィア、フェニーチェ劇場 (Teatro La Fenice) ***

自筆楽譜：*Vt*

全集版：I / 34 (Philip Gossett e Alberto Zedda 校訂, Fondazione Rossini Pesaro, 2001.)

* 「セミラーミデ」は役名の発音に準拠。当該人物は紀元前 9 世紀に実在したバビロニア人のアッシリア王妃サムラマト (Sammuramat) がギリシャ伝説でアッシリア女王セミラーミス (Semiramis) となったものである。ロッシーニが許可した 1860 年パリ初演のフランス語版の題名は「セミラミス *Sémiramis*」となる。

** *melo-dramma* の綴りも含めて初版台本に準拠。タイトル部分に無い幕数を [] 内に補足。

*** 初版台本は Gran Teatro La Fenice と記載。

35 ランスへの旅、または金の百合亭* *Il viaggio a Reims, ossia L'albergo del giglio d'oro*

劇区分：1 幕のドランマ・ジョコーゾ *dramma giocoso in un atto***

台本：ルイーダ・バルローキ [バロッキ] (Luigi Balocchi [Balocchi]***, 1766-1832) イタリア語

初演：1825 年 6 月 19 日 パリ、イタリア劇場 (Théâtre Italien) [イタリア王立劇場 (Théâtre Royal Italien) / サル・ルーヴォア (Salle Louvois)] ****

自筆楽譜：excerpt *Rc*

全集版：I / 35 (Janet L. Johnson 校訂, Fondazione Rossini Pesaro, 1999.)

* 「ランスへの旅、または黄金の百合亭」の訳題も使われたが、本目録では「黄金」を「金」とする題名表記を採用する。一般的な題名表記では *ossia* 以下を省略して「ランスへの旅 *Il viaggio a Reims*」としうる。

** 初版台本に準拠。

*** 初版台本は Balochi (バローキ) と表記し、全集版もこれを採用している。けれども音楽関係の書誌や文献は通例 Balocchi を採用しており (例: ICCU 目録)、本目録では [バロッキ] [Balocchi] と補足した (以下、同)。なお、イタリアの浩瀚な人物辞典は「バッコ (Balocco)」で項目を立て、「BALLOCO, Giuseppe Luigi (Balochi, Balocchi, Balocco)」を採用している (*Dizionario Biografico degli Italiani*・Volume 5.,1963.)。

**** イタリア劇場は一般名称。当時の正式名称は Théâtre Royal Italien (イタリア王立劇場) で、会場を限定する意味では Salle Louvois (サル・ルーヴォア) の付記が望ましい。

36 コリントスの包囲* *Le siège de Corinthe*

劇区分: 3 幕のトラジェディ・リリック *tragédie lyrique en tris actes* **

台本: ルイージ・バローキ [バロッキ] (Luigi Balochi [Balocchi],1766-1832) 及びアレクサンドル・スメ (Alexandre Soumet,1788-1845) *** フランス語

初演: 1826 年 10 月 9 日 パリ、オペラ座 (Opéra) [王立音楽アカデミー劇場 (Théâtre de l'Académie Royale de Musique) /サル・ル・ペルティエ (Salle Le Peletier)] ****

自筆楽譜: excerpts *Pe, Po, I-FOc*

全集版: I / 36 (未成立)

* 31 《マオメット 2 世》のフランス語改作に当たる作品で、劇の舞台はネグロポンテ島からコリントスに移されている。「コリント攻城」や「コリント攻囲」の訳題も使われたが、最も流布したのは「コリントの包囲」である。この作品はフランス・オペラで、*Corinthe* は「コリント」と発音されるが、本目録における地名の日本語表記原則に照らせば「コリントス」とすべきで、これを採用した。なお、劇の内容から新たに訳題をつけるなら「コリントスの攻略」であろうが、ここではオスマン帝国軍に包囲されたコリントスでドラマが始まり、最終的に敗北して街が炎上するまでを描くことから従来どおり「包囲」を採用し、「コリントスの包囲」とした。

** 初版台本に準拠。ジャンルのには grand opéra とも解説しうるが、劇の区分名称はあくまで台本に基づく *tragédie lyrique* とすべき。

*** 初版台本に作家名の記載無し。

**** オペラ座 (Opéra) は 17 世紀の創立以来の総称もしくは一般名称。正式な初演劇場は Théâtre de l'Académie Royale de Musique (王立音楽アカデミー劇場) で、会場を限定する意味では Salle Le Peletier (サル・ル・ペルティエ) を付記するのが望ましい (以下、同)。

37 モイーズ *Moïse* [モイーズとファラオン、または紅海横断 *Moïse et Pharaon, ou Le passage de la Mer Rouge*]*

劇区分: 4 幕のオペラ *opéra en quatre actes* **

台本: ルイージ・バローキ [バロッキ] (Luigi Balochi [Balocchi],1766-1832) 及びヴィクトル=ジョゼフ=エティエンヌ=ド=ジュイ (Victor-Joseph-Étienne de Jouy,1764-1846) *** フランス語

初演: 1827 年 3 月 26 日 パリ、オペラ座 (Opéra) [王立音楽アカデミー劇場 (Théâtre de l'Académie Royale de Musique) /サル・ル・ペルティエ (Salle Le Peletier)]

自筆楽譜: excerpt *Pe, US-NYp, STh, Wc and elsewhere.*

全集版: I / 37 (未成立)

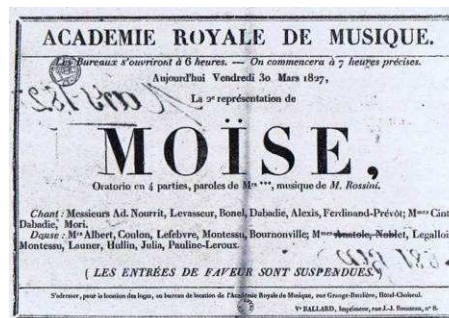
* 24 《エジプトのモゼ》のフランス語改作に当たり、初演は初日のみ初版台本どおり *Moïse et Pharaon, ou Le passage de la Mer Rouge* の題名で行われたと思われる (現時点での推測)。しかし、筆者の把握する 2 日目 (3 月 30 日) の上演告知では題名が *Moïse* とされ、最初期の印刷台本における題名も *Moïse* である。初演年に出版された初版楽譜 (Paris, Troupenas. ロッシーニから正式に権利を得て出版) も総譜とピアノ伴奏譜共に題名は *Moïse* で、他のフランスにおける印刷楽譜も第 2 版を含めて基本的に *Moïse* を題名とする。それゆえなんらかの事情で *Moïse et Pharaon, ou Le passage de la Mer Rouge* が初演初日だけの題名なら、「セビーリャの理髪師」と同じ屈辱で「モイーズ *Moïse*」を最初に掲げ、*Moïse et Pharaon, ou Le passage de la Mer Rouge* は二次的な位置づけとなる。ちなみに ROF では *Moïse et Pharaon, ou Le passage de la Mer Rouge* の題名で上演したが、バーレンライター社の批判校訂版は *Moïse* の題名で出版を予告している。なお、通常の *Moïse* の発音は i が長音でなく「モイズ」となるが、楽譜ではレシタティブと歌唱部分の双方で i に長い音価の音符を充て、歌唱上は常に「モイーズ」となるため本目録では後者の表記を採用する。ここでのモイーズは古代イスラエルの預言者モーセ (またはモーゼ)、ファラオンは古代エジプトの神権皇帝の称号を意味するファラオに該当することから「モーセとファラオ」や「モーゼとファラオ」の訳題も使われてきた。しかし、登場人物の名前の発音とフランス・オペラに沿った訳題は「モイーズ」「モイーズとファラオン」であり、「エジプトのモゼ」との整合性から

もモーゼやモーゼは採用し得ない [註]。

註：役名 Moïse の発音に基く「モイズ」を採用すればフランス語版にのみこれを適用でき、イタリア語版「モゼ」との区別が明確になる。これに対し「モーゼ (またはモーゼ)」を採用すると、オリジナル・フランス語版 *Moïse* も等しく「モーゼ (またはモーゼ)」となり、表記上の区別が失われる。

** 初版台本に準拠。ジャンルの的にはグラントペラ *grand opéra* とも解説しうるが、劇の区分名称は台本に基づいて単に *opéra* とすべき。

*** 初版台本に作家名の記載無し。



題名を *Moïse* とする初演 2 日目 (3 月 30 日) の上演告知

38 オリー*伯爵 *Le comte Ory*

劇区分：2 幕のオペラ *opéra en deux actes* **

台本：ウジェーヌ・スクリーブ (Eugène Scribe, 1791-1861) 及びシャルル＝ガスパール・ドレストル＝ポワルソン (Charles-Gaspard Delestre-Poirson, 1790-1859) *** フランス語

初演：1828 年 8 月 20 日 パリ、オペラ座 (Opéra) [王立音楽アカデミー劇場 (Théâtre de l'Académie Royale de Musique) / サル・ル・ペルティエ (Salle Le Peletier)]

自筆楽譜：excerpts *B-Bnichotte, F-Po*

全集版：I / 38 (未成立)

* 通常の *Ory* の発音は「オリ」だが、楽譜ではレシタティブと歌唱部分の双方で *-ry* に *O* の 2 倍の音価 (最短で 1・5 倍、最長 4 倍で通例は 2 倍) の音符を充て、歌唱上は常に「オリー」となるため本目録では「オリー伯爵」を採用する。

** 初版台本に準拠。喜歌劇のためジャンルをオペラ・コミック *opéra comique* とする文献もあるが、伝統的なオペラ・コミックとは様式が異なり、劇の区分名称は台本に基づいて単に *opéra* とすべき。

*** 初版台本は Eugène Scribe et Charles-Gaspard Delestre-Poirson と記載。なお、ドレストル＝ポワルソンの本名はオギュスト＝シモン＝ジャン＝クリゾストム・ポワルソン Auguste-Simon-Jean-Chrysostome Poirson である。

39 ギョーム・テル* *Guillaume Tell*

劇区分：4 幕のオペラ *opéra en quatre actes* **

台本：ヴィクトル＝ジョゼフ＝エティエンヌ＝ド＝ジュイ (Victor-Joseph-Étienne de Jouy, 1764-1846) 及びイポリート＝ルイ＝フロラン＝ビス (Hippolyte-Louis-Florent Bis, 1789-1855) *** フランス語

初演：1829 年 8 月 3 日 パリ、オペラ座 (Opéra) [王立音楽アカデミー劇場 (Théâtre de l'Académie Royale de Musique) / サル・ル・ペルティエ (Salle Le Peletier)]

自筆楽譜：*Pc*

全集版：I / 39 (M. Elizabeth C. Bartlett 校訂, Fondazione Rossini Pesaro, 1992.)

* 日本では「ウィリアム・テル」が長く使われてきたが、英語に基づく訳題の採用は無意味かつ不適切である。カナ表記に「ギョーム・テル」も使われたが、「ギョーム・テル」に一元化すべき。なお、イタリア語版は「グリエルモ・テル *Guglielmo Tell*」として区別する。

** 初版台本に準拠。ジャンルの的にはグラントペラ *grand opéra* とも解説しうるが、劇の区分名称は台本に基づいて単に *opéra* とすべき。

*** 初版台本は作者を MM. Jouy et Hippolyte Bis と記載。全集版ではハイフンとアクサンのない Victor Joseph Etienne de Jouy と Hippolyte Louis Florent Bis が使われるが、本目録では上記のように補正した。なお、台本の追補者にアルマン・マラスト (Armand Marrast [Marie-François-Pascal-Armand Marrast], 1801-1852) とアドルフ・クレミュー (Adolphe Crémieux, 1796-1880) も挙げられるが、追補者を本来の台本作家と同列に扱うことはできず、通常目録では前記 2 人のみで充分。

付記：消失作品とロッシーニの関与したパステイッチョ・オペラ

イタリア王ウーゴ *Ugo, re d'Italia*

註：未完・紛失作品のため、題名のみ掲げる。

イヴァノエ *Ivanhoè*

劇区分：3幕のオペラ *opéra en trois actes*

台本：エミール・デシャン (Émile Deschamps, 1791-1871) 及びガブリエル＝ギュスターヴ・ド・ヴェリ (Gabriel-Gustave de Wailly, 1804-1878) * フランス語

初演：1826年9月15日 パリ、オデオン劇場 (Théâtre de l'Odéon) **

自筆楽譜：excerpt *GB-Lbl*.

全集版：(未成立)

* 初版台本に作者名の記載なし。

** オデオン劇場 (オデオン座とも表記) は一般名称で、初版台本は *Théâtre Royale de l'Odéon* (オデオン王立劇場) と記載。

註：アントーニオ・パチーニ (Antonio Pacini, 1778-1866) がロッシーニのオペラの楽曲を用いて再構成した作品。その成立にロッシーニの関与あり。

ロベール・ブリュス *Robert Bruce*

劇区分：3幕のオペラ *opéra en trois actes*

台本：アルフォンス・ロワイエ (Alphonse Royer*, 1803-1875) 及びギュスターヴ・ヴァエツ (Gustave Vaëz**, 1812-1862) フランス語

初演：1846年12月30日*** パリ、オペラ座 (Opéra) [王立音楽アカデミー劇場 (Théâtre de l'Académie Royale de Musique)]

全集版：(未成立)

* Gossett-2001.は Reyer 誤植。

** 初版台本はèのアクセントが欠落。

*** 初版台本には12月23日と記載されているが、実際の初演日は30日。

註：オペラ座監督レオン・ピレによる新作依頼を断ったロッシーニが、代案として《湖の女》のフランス語版を許可して成立した作品。音楽はアブラム・ルイ・ニデルマイエル (Abraham Louis Niedermeyer, 1802-1861) がロッシーニの指示に従って選択・編曲している。初版台本はニデルマイエルの名前を掲げず、ロッシーニ作品として初演された。